福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1394 集

野方久保遺跡 5

－野方久保遺跡第 6 次調査報告－

2020

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1394 集

野方久保遺跡 5

－野方久保遺跡第 6 次調査報告－

調査略号：NKK-6

調査番号：1640

2020

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、数多くの文化財が残されています。これらの文化財を保護し、後世に伝えることは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い記録保存に努めています。

本書は、店舗建設に伴う野方久保遺跡第6次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から中世にかけての集落を確認することができました。これらはこの地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後に株式会社コスモス薬品様をはじめとする多くの関係者の方々には、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例言

1．本書は、福岡市西区野方１丁目 128 番１、143 番１、150 番１における店舗建設に先立ち、福岡市教育委員会が平成 29 年２月６日から平成 29 年６月９日にかけて発掘調査を実施した野方久保遺跡群第６次発掘調査の報告である。
2．発掘調査は上記の主体により行われ、調査は福岡市埋蔵文化財課 山本晃平が担当した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構の実測図作成は、山本が行った。
5．本書に掲載した遺物の実測図作成は山崎賀代子・山本が行った。
6．本書に掲載した遺構及び遺物の写真撮影は山本が行った。
7．本書に掲載した挿図の製図は山本・山崎が行った。
8．本書で用いた方位は磁北である。
9．本書で用いた座標は世界測地系による。
10．調査で検出した遺構については、通し番号を付している。
11．本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管され、活用されていく予定である。
12．本書の執筆・編集は山本が行った。

野方久保遺跡群第６次発掘調査基本情報

遺跡名	野方久保遺跡	調査次数	６次	遺跡略号	NKK-6
調査番号	1640	分布地図図幅名	91	遺跡登録番号	0389
申請地面積	4381 ㎡	調査対象面積	1020 ㎡	調査面積	974.99 ㎡
調査期間	平成 29 年２月６日～平成 29 年６月９日			事前審査番号	27-2-260
調査地	福岡市西区野方１丁目 128 番１、143 番１、150 番１				

本文目次

第１章　はじめに…… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の組織 …… 1
　3　遺跡の立地と歴史的環境 …… 2
　4　野方久保遺跡のこれまでの調査 …… 6
第２章　調査の記録…… 9
　1　調査の概要 …… 9
　2　遺構と遺物 …… 9
　（1）掘立柱建物 …… 9
　（2）溝 …… 9
　（3）井戸 …… 24
　（4）土壙墓 …… 27
　（5）他の遺構出土土器 …… 28
　（6）石製品 …… 31
第３章　まとめ…… 36

挿図目次

第１図　野方久保遺跡周辺遺跡分布図（1/10000）…… 3
第２図　野方久保遺跡調査地点配置図（1/5000）…… 4
第３図　野方久保遺跡第６次調査地点調査範囲（1/500）…… 5
第４図　野方久保遺跡第６次調査全体図（1/200）…… 7
第５図　掘立柱建物 01 実測図（1/80）…… 10
第６図　掘立柱建物 02 実測図（1/80）…… 10
第７図　掘立柱建物 03 実測図（1/80）…… 10
第８図　掘立柱建物 01 土層断面図（1/40）…… 11
第９図　溝 001 断面図（1/40）…… 13
第10図　溝 001 出土遺物（1/4）…… 13
第11図　溝 002・溝 152 土層断面図（1/40）…… 14
第12図　溝 002 出土遺物〔1〕（1/4）…… 15
第13図　溝 002 出土遺物〔2〕（1/4）…… 16
第14図　溝 002 出土遺物〔3〕（1/4）…… 17
第15図　溝 002 出土遺物〔4〕（1/4）…… 18
第16図　溝 152 出土遺物（1/4）…… 20
第17図　溝 154 出土遺物〔1〕（1/4）…… 22
第18図　溝 154 出土遺物〔2〕（1/4）…… 23

第19図　井戸 147 実測図（1/40）…… 24
第20図　井戸 147 出土遺物（1/4）…… 24
第21図　井戸 023 実測図（1/40）…… 25
第22図　井戸 023 出土遺物（1/4）…… 25
第23図　井戸 023 №対応図と分類図…… 26
第24図　土壙墓 171 実測図（1/20）…… 27
第25図　土壙墓 171 出土遺物（1/4）…… 28
第26図　その他の遺構出土遺物〔1〕（1/4）…… 29
第27図　その他の遺構出土遺物〔2〕（1/4）…… 30
第28図　石剣実測図（1/2）…… 32
第29図　石鏃実測図（1/1）…… 32
第30図　石斧実測図（1/4）…… 33
第31図　石包丁実測図（1/2）…… 34
第32図　砥石・台石実測図（1/8）…… 35
第33図　木器実測図（1/3）…… 36

表図版

表 1　井戸 023　井戸枠計測表…… 26

図版目次

図版 1　（1）調査区全景（南から）
図版 2　（2）掘立柱建物 01 全景（東から）　（3）119 断面（西から）　（4）149 断面（西から）
（5）148 断面（西から）　（6）099 断面（西から）　（7）027 断面（西から）
（8）026 断面（南から）　（9）井戸 147 全景（北から）
図版 3　（10）溝 002 全景（北から）（11）溝 152（南西から）（12）溝 002・溝 152 断面（南から）
（13）井戸 023　1 段目（北から）　（14）井戸 023　2 段目（北から）
（15）井戸 023　3 段目（北から）　（16）土壙墓 171 全景（南西から）
図版 4　（17）溝 001 出土遺物　（18）溝 002 出土遺物〔1〕
図版 5　（19）溝 002 出土遺物〔2〕
図版 6　（20）溝 152 出土遺物〔1〕
図版 7　（21）溝 152 出土遺物〔2〕
図版 8　（22）溝 154 出土遺物（73～90）　（23）井戸 147 出土遺物（91～93）
図版 9　（24）井戸 023 出土遺物　（25）土壙墓 171 出土遺物
図版10　（26）石製品・木製品
図版11　（27）井戸 023 井戸枠〔1〕
図版12　（28）井戸 023 井戸枠〔2〕

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

平成 27 年６月 12 日付に福岡市西区野方１丁目 128 番１、143 番１、150 番１の店舗建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課に提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である野方久保遺跡に所在し、周辺の確認調査・発掘調査において遺跡の存在が確認されている。そのため、当該地にも埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成 27 年 10 月 30 日に確認調査を行った。その結果、地表面から 50cm 下で遺構を確認した。これらから埋蔵文化財課では、遺構の保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、店舗建設において埋蔵文化財への影響を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成 29 年２月３日付で事業者である株式会社コスモス薬品を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年２月６日から発掘調査を行い、６月９日に終了した。

２　調査の組織

調査委託：株式会社コスモス薬品

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成 28・29 年度・整理報告：平成 30 年度・令和元年度）

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課（平成 29 年度までは文化財部）

課　　長	常松　幹雄	（28・29 年度）
	大庭　康時	（30 年度）
	菅波　正人	（令和元年度）
調査第１係長	吉武　　学	（28 年度）
調査第２係長	大塚　紀宜	（29 年度）

調査庶務：文化財活用課管理調整係（29 年度までは文化財保護課）

係　　長	藤　　克己	（29 年度）
	松原加奈枝	（29 年度）

事前審査：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課（平成 29 年度までは文化財部）

事前審査係長	佐藤　一郎	（28 年度）
	本田浩二郎	（29 年度）
主任文化財主事	池田　祐司	（28・29 年度）
	田上勇一郎	（30・令和元年度）
文化財主事	大森真衣子	（28 年度）
	中尾　祐太	（29 年度）
文化財主事	山本　晃平	（30・令和元年度）

調査・整理担当：同課　　山本　晃平（28～令和元年度）

3　遺跡の立地と歴史的環境

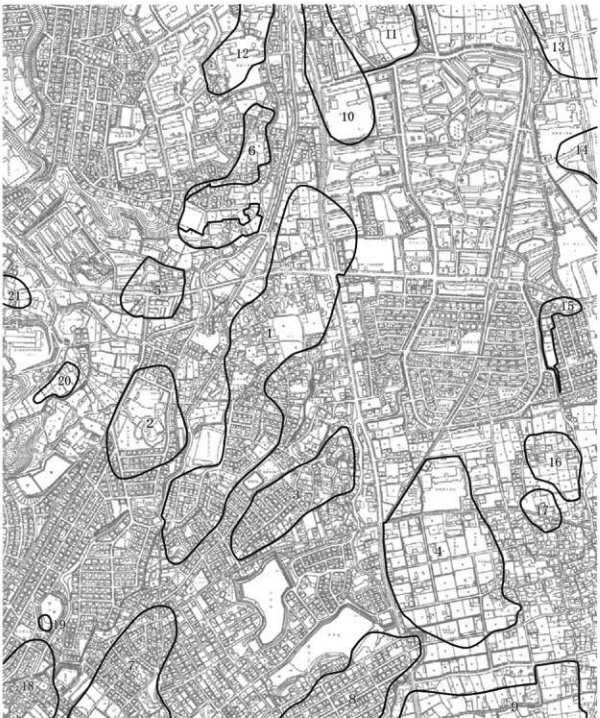
福岡市の西部に広がる早良平野は、三方を脊振山のその支脈によって囲まれ、北の博多湾に向かって閉口する平野である。この早良平野の西麓には西山～飯盛山、叶岳、長垂山の小山麓が連なり、糸島平野との境を画している。これらの山麓の麓には、小河川の開析によって形成された段丘と山塊から派生する舌状丘陵が幾筋も連なっている。

野方久保遺跡は西区野方の飯盛山北麓に源を発して今津湾に注ぐ十郎川の上流域右岸に位置する。この遺跡はこの十郎川の開析によって形成された細長い低段丘上に立地し、その段丘上にはや弥生時代から古墳時代の集落跡や墳墓域が広がっている。またその上流域につづく丘陵上には野方平原遺跡、野方勧進原遺跡、羽根戸原遺跡などがあり、十郎川を挟んだ左岸には弥生時代後期の環濠集落跡として有名な国史跡の野方中原遺跡が対峙している。

野方久保遺跡のある室見川左岸域には、この丘陵部や段丘上を中心に遺跡が展開している。旧石器時代～縄文時代の遺跡は散漫で羽根戸遺跡や吉武遺跡群などがあるに過ぎない。しかし弥生時代になると豊富な青銅器や玉類を副葬する吉武遺跡群を中心に遺跡数が急増し平野一円に広く展開する。野方久保遺跡にも青銅器や玉類を副葬する甕棺墓があり、室見川右岸には有田遺跡群、東入部遺跡などがある。有田遺跡群は旧石器時代から中世までの複合遺跡で早良平野の拠点的集落の１つである。特に弥生時代初頭には環濠が掘削され、古墳時代にかけて連綿と集落が営まれる。東入部遺跡では弥生時代前期後半から後期初頭にかけての甕棺墓、木棺墓、土壙墓が検出され、細形銅剣・鉄刀などが副葬されている。十郎川の対岸には野方中原遺跡、湯納遺跡や弥生時代終末期の墳墓である宮の前遺跡がある。野方中原遺跡では弥生時代後期から古墳時代にかけての集落・墓地群が検出されており、弥生時代の環濠集落の展開を考える上で重要な資料である。

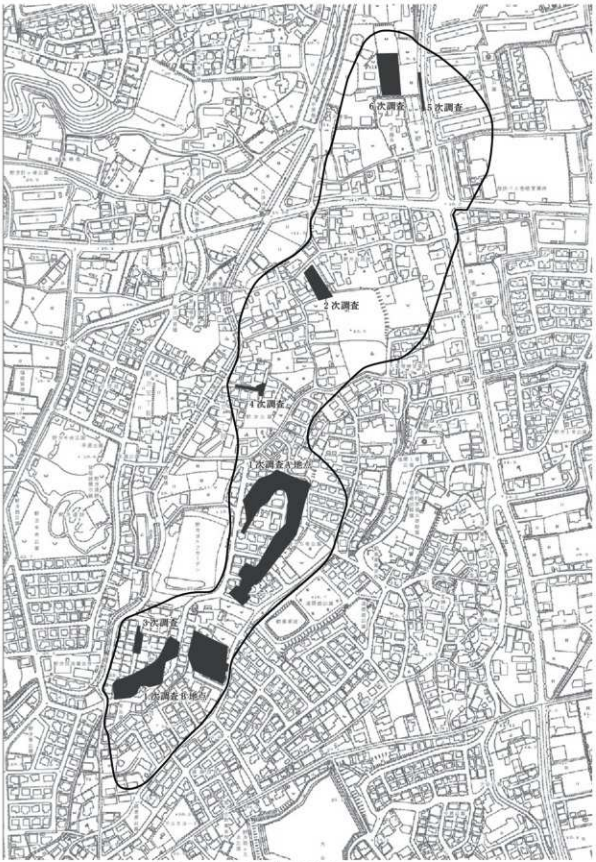
古墳時代には、全長 75m を測る前方後円墳である拝塚古墳が５世紀前後に築造される。また帆立貝式の樋渡古墳などが築造されている。室見川右岸の有田遺跡群では古墳時代後期から奈良時代にかけて柵や溝で区画された大型倉庫群が各所に営まれており、官衙的施設の存在が指摘されている。他にも陶質土器や初期須恵器などを副葬した古墳も多数検出されており、朝鮮半島とのつながりを窺うことができる。また平野の西麓に連なる山麓地帯に広石古墳群、羽根戸古墳群、金武古墳群などの大小の群集墳が造営される。

奈良時代以降になると、城ノ原廃寺など寺院も建設されるようになり、また福岡平野から糸島平野を結ぶ古代官道が整備され有田遺跡群や原遺跡では官道の側溝が検出されている。野方久保遺跡がある野方周辺も「和名抄」に記載されている「額田郷」に比定されている地域であり、古代官道の馬家として要衝の地である。



1．野方久保遺跡　2．野方中原遺跡　3．道隈遺跡　4．戸切遺跡
5．打ヶ浦遺跡　6．野方平原遺跡　7．羽根戸原A遺跡　8．羽根戸原B遺跡
9．羽根戸原C遺跡　10．牟多田遺跡　11．拾六町平田遺跡　12．コノリC遺跡
13．橋本一丁田遺跡　14．橋本遺跡　15．橋本榎田遺跡　16．戸切巡り町遺跡
17．兵庫遺跡　18．野方塚原遺跡　19．野方新池遺跡　20．野方中原B遺跡
21．野方岩名隈遺跡

第1図　野方久保遺跡周辺遺跡分布図（1/10000）



第２図　野方久保遺跡調査地点配置図（1/5000）

第３図　野方久保遺跡第６次調査地点調査範囲（1/500）

4　野方久保遺跡のこれまでの調査

野方久保遺跡ではこれまで本報告を含めると6回調査されている。これまでの調査で弥生時代前期末から中世までの遺構が確認されている。各調査地点は第2図に記載している。

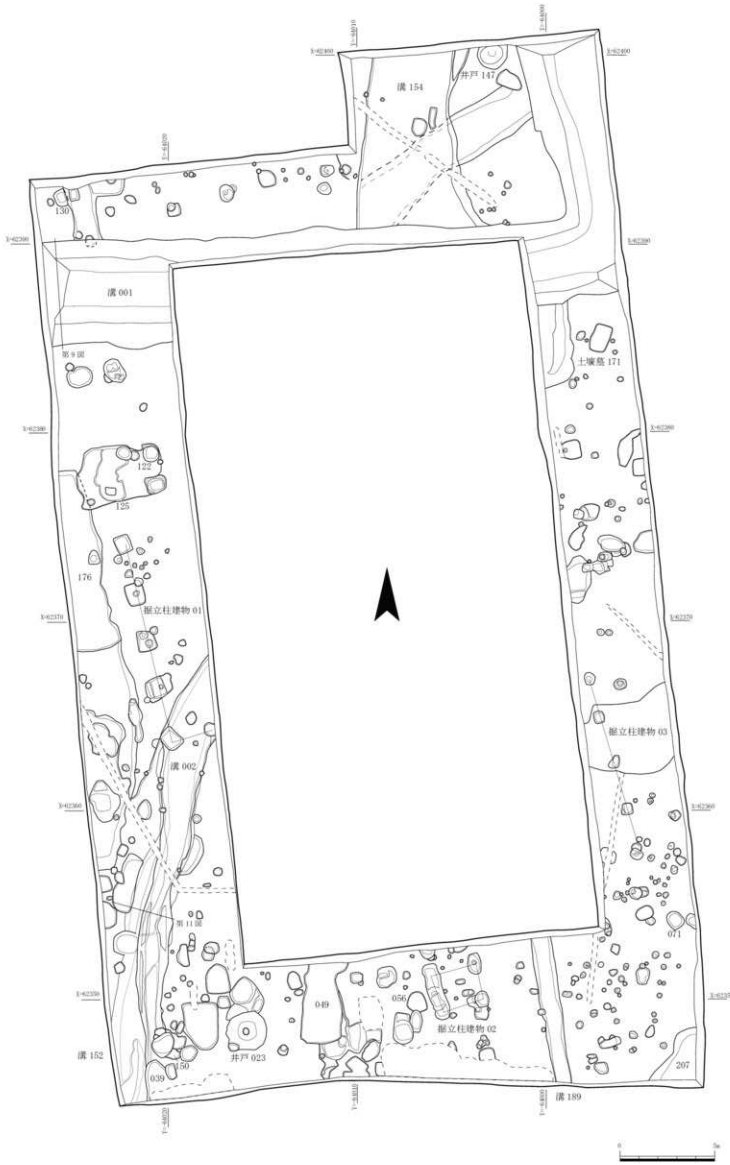
第1次調査：1983（昭和58）年調査。遺跡の南側に位置する。住宅建設に伴って調査が行われた。A地点とB地点二ヶ所で調査を行っている。遺構面は2面確認されている。弥生時代後期から中世までの遺構が検出されており、A地点では方墳・竪穴住居（61軒）・掘立柱建物・土坑状遺構・井戸状遺構などが、B地点では水田跡・小児甕棺墓・溝・竪穴住居（8軒）などが確認された。遺物も銅鏃・鉄斧・鉄鏃など金属関係の製品小児甕棺墓から小型勾玉やガラス玉などが、他にも朱の付着した注口鉢が出土している。

第2次調査：1986（昭和61）年調査。遺跡の中心からやや北側に位置する。弥生時代前期末～中期後半の甕棺墓などが67基や古墳時代の柱穴などが確認されている。このうち中期前半の甕棺墓からは細形銅剣・把頭飾・碧玉製管玉が、また中期中頃の甕棺墓からは翡翠製勾玉・鉄鏃が副葬されていた。

第3次調査：1991（平成3）年調査。遺跡の南側で第1次調査のB地点の北側に位置する。戸建住宅建設に伴って調査が行われた。古墳時代後期から中世の土坑・溝・ピットを確認した。

第4次調査：1992（平成4）年調査。遺跡のおよそ中心に位置する。住宅建設に伴う道路工事に伴って調査が行われた。弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴住居（8軒）・土坑（29基）・溝（8条）・ピットなどが確認された。

第5次調査：1999（平成11）年調査。遺跡の北側に位置する。道路新設工事に伴って調査が行われた。弥生時代から中世までの竪穴住居・土坑・溝が確認された。



第 4 図　野方久保遺跡第 6 次調査全体図（1/200）

第２章　調査の記録

１　調査の概要

今回報告する野方久保遺跡第６次調査は、福岡市西区野方１丁目に所在する。調査地点は野方久保遺跡の北端に位置する。

遺構検出は重機で遺構面上面まで剥ぎ取って実施した。遺構面まではGL-50㎝前後である。調査区内は攪乱が少なく遺構が濃く残されていた。検出遺構は掘立柱建物３軒・溝５条・井戸２基・土坑墓１基、他柱穴・ピット多数検出した。

発掘調査は平成29年２月６日から着手した。まず重機で遺構面まで剥ぎ取り、並行して発掘器材の搬入などを実施した。一度に表土を剥ぎ取り調査区の北側から調査をおこなった。途中空中写真で全景を取り、平成29年６月９日までに表土の埋め戻しと発掘器材などを撤収してすべての調査を完了した。

２　遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに調査遺構及び出土遺物について報告する。

１）掘立柱建物

掘立柱建物01（第５・８図、図版２）

調査区の西側から検出された掘立柱建物である。４間×１間分確認できた。一部が調査区外に延びており、全容は確認できなかった。主軸方位はN-16°―Wである。柱間隔は200～280㎝である。掘方の平面はおよそ隅丸方形を呈しており、一辺1m前後である。ほぼすべてに柱痕跡が明確に確認でき、柱の径は20㎝～30㎝である。第６図に各柱穴の土層断面図を載せている。

出土遺物　各掘方から土師器の壺や甕の破片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

掘立柱建物02（第６図）

調査区の南側で検出された１間×１間の掘立柱建物である。主軸方位はN-17°―Wである。柱間隔は200～240㎝である。西側は布掘りであり、東側は柱痕跡が明確に残っている。柱の径は20～25㎝である。

出土遺物　各掘方から土師器・須恵器の甕などの破片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

掘立柱建物03（第７図）

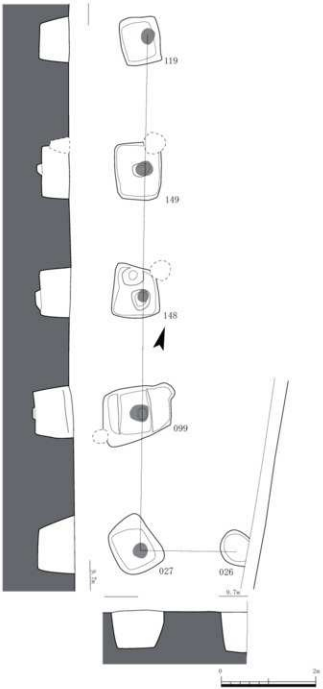
調査区の東側で検出された掘立柱建物である。４間分確認できたが、これらに対応する柱穴を確認できなかった。検出位置から西側の調査区外に延びている可能性もある。主軸方位はN-18°―Wである。柱間隔は220～250㎝である。

出土遺物　各掘方から土師器の破片が出土しているか、小片のため図化できなかった。

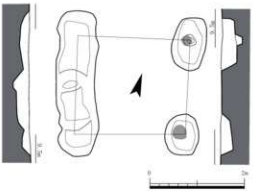
２）溝

溝001（第４図・第９図）

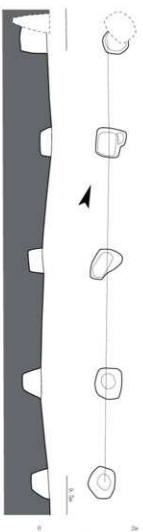
調査区の北側で検出された大型のＬ字形の溝である。確認できる最大幅5.5m、深さ1.9mである。



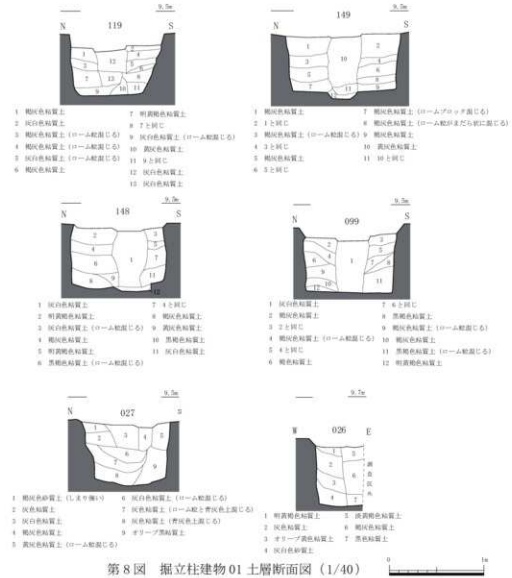
第 5 図　掘立柱建物 01 実測図（1/80）



第 6 図　掘立柱建物 02 実測図（1/80）



第 7 図　掘立柱建物 03 実測図（1/80）



第８図　掘立柱建物01 土層断面図（1/40）

断面は略逆台形を呈する。多くは調査区外に延びており、全容は把握できない。

出土遺物（第10図・第33図、図版4）　**1**は土師器の皿である。口径は9.2㎝、器高は1.3㎝、底径は7.1㎝を測る。底部調整は回転糸切りである。体部外面はナデ調整である。胎土は精緻で3㎜以下の白色粒・微粒の橙色粒子・雲母を含む。色調は灰色ににぶい黄橙色を呈する。**2**は土師器の坏である。口径は13.0㎝、器高は2.8㎝、底径は8.4㎝を測る。底部調整は回転糸切りである。口縁及び体部は摩滅していて調整がわからない。口縁部は外反している。胎土は精緻で2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**3**は須恵器の高台付の坏である。口径は12.0㎝、器高は3.6㎝、高台径は8.4㎝を測る。底部及び体部外面は回転ナデ調整で、内面底部はナデ調整である。胎土は3㎜以下の白色粒を含む。色調は灰色を呈する。**4**は瓦玉である。青磁椀の底部を打ち欠いたものである。器高は1.7㎝、高台径は5.5㎝を測る。内面底部と高台に施釉している。胎土は精緻で黒色微粒子を若干含む。胎土は灰色で釉薬はオリーブ灰色～灰オリーブ色を呈する。**5**は青磁の椀である。口径は16.0㎝、器高は7.0㎝、高台径は6.7㎝を測る。外面体部から高台にかけて施釉している。内面には文様が施されている。高台底部は露胎しており、にぶい褐色を呈する。胎土は精緻であ

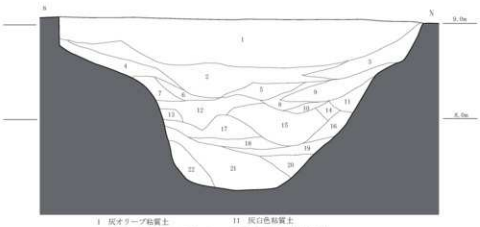
る。胎土は灰色で、釉薬はオリーブ灰色を呈する。**6** は白磁の椀である。口径は 17.4 ㎝、器高は 6.8 ㎝、高台径 6.2 ㎝を測る。外面体部上半部から内面にかけて釉薬が施されている。外面体部下半部から高台にかけては露胎している。口縁端部が外反している。胎土は精緻である。色調は灰白色～淡黄色を呈する。**7～10** は滑石製の石鍋である。**7** は口径 25.1 ㎝を測る。口縁部直下に鍔がある。口縁部にはノミの痕跡が、内面には削り痕誠がある。また外面にはススが付着している。色調は灰色を呈する。**8** は口径 22.4 ㎝を測る。口縁部直下に鍔がある。鍔の上下にノミ痕？と思われる調整痕がある。外面にはススが付着している。内面はきれいに平滑している。色調は灰色である。**9** は口径 22.2 ㎝を測る。口縁部の四方に熘上把手がつく。外面にはノミ痕がある。色調は灰色である。**10** は石鍋の底部である。小片のため法量は復元できなかった。外面にはノミ痕がある。**11～13** は用途不明の土製品である。**11** は最大残存長 8.1 ㎝、最大残存幅 5.4 ㎝、最大厚さ 3.2 ㎝を測る。断面は楕円形を呈する。外面には指おさえの痕跡がある。胎土は 7 ㎜以下の大粒の白色粒子を多く含む。色調は黄灰色を呈する。**12** は最大残存長 9.6 ㎝、最大幅 5.8 ㎝、最大厚さ 3.8 ㎝を測る。断面は楕円形を呈する。外面には指おさえの痕跡とナデ調整がある。胎土は精緻で 1 ㎜以下の大粒の白色粒子・雲母を若干含む。色調は灰色～淡黄色を呈する。**13** は最大残存長 7.6 ㎝、最大幅 5.1 ㎝、最大厚さ 4.7 ㎝を測る。断面は円形を呈する。胎土は精緻で 2 ㎜以下の白色粒と雲母を若干含む。他にも土師器・須恵器・陶磁器の小片が出土している。

160～162 は木器である。**160** は蓋もしくは底板である。端だけ欠損している。最大長 11.4 ㎝、最大幅 10.6 ㎝、厚さ 0.5 ㎝を測る。柾目で丸くきれいに切り取られている。**161** も底板と思われる。最大残存長 15.4 ㎝、最大残存幅 4.1 ㎝、最大厚さ 1.3 ㎝を測る。柾目である。**162** は用途不明の木製品である。最大残存長 9.1 ㎝、最大残存幅 1.1 ㎝、最大厚さ 0.9 ㎝を測る。断面は方形である。折れている部分に孔をあけた痕跡がある。

溝 002（第 4 図・第 11 図、図版 3）

調査区の南西側で検出されたおよそ南北に延びる溝である。 確認できる長さは 20m で最大幅は 2.5m、深さは 20 ㎝である。埋土は黒色粘質土である。掘立柱建物 02 に切られている。埋土内から数多くの土師器などの土器が出土している。

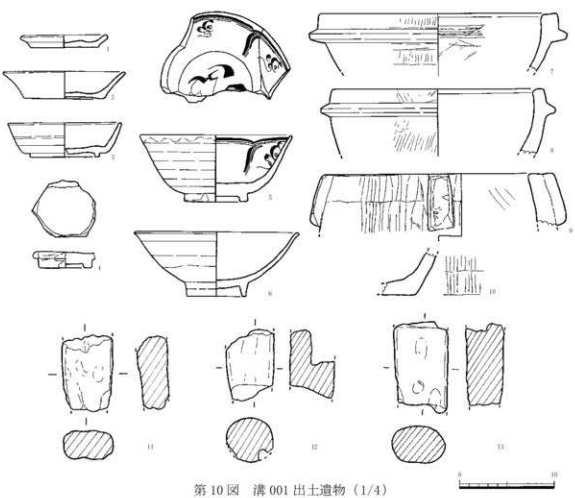
出土遺物（第 12～15 図、図版 4・5） **14～17** は土師器の鉢である。**14** は口径 24.8 ㎝、器高 7.5 ㎝、底径 18.6 ㎝を測る。口縁部と底部は一部しか残存していない。口縁部は丸くおさまる。底部は平底か。外面はナデ調整か。摩滅は激しい。内面は口縁部と底部はナデ調整だが体部はケズリが施されている。胎土は 5 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄褐色を呈する。**15** は口径 13.7 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る。口縁部は細くなりやや尖る。底部は丸底になっている。外面はナデ調整。内面は細かいハケ目調整で、底部付近には指おさえ痕跡がある。胎土は 3 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色～黄橙色を呈する。**16** は口径 22.3 ㎝、器高 8.5 ㎝を測る。口縁部は丸くおさまる。底部は丸底になっている。外面は体部に叩き痕があるが、全体的に摩滅している。内面も摩滅しているが、ナデ調整が見られる。胎土は 5 ㎜以下の石英・長石・雲母を多く含む。色調は黄橙色を呈する。**17** は口径 27.2 ㎝、器高 11.4 ㎝を測る。口縁端部は平坦であるが、中心が少し凹む。底部は丸底になっている。外面は口縁部から体部上半部は細かいヨコ・ナナメハケ、体部下半部から底部はケズリ調整が施されている。内面は口縁部から体部上半部はナナメハケ、体部下半部から底部はヨコ・タテハケが施されている。胎土は粗く、6 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**18～19** は土師器の高坏である。**18** は口径 21.8 ㎝、器高 16.9 ㎝、脚部径 13.0 ㎝を測る。坏部体部は直線



1　灰オリーブ粘質土
2　黒褐色粘質土（しまりが強い）
3　灰褐色粘質土
4　灰黄褐色砂質土
5　淡黄色砂質土
6　灰色砂質土
7　淡黄色シルト
8　灰色砂質土
9　5と同じ
10　黒褐色粘質土
11　灰白色粘質土
12　灰色粘質土（木片含む）
13　灰オリーブ砂質土
14　2と同じ
15　灰色粘質土（木片含む）
16　12と同じ
17　灰色砂質土
18　12と同じ
19　2と同じ
20　灰色砂質土
21　灰色粘質土
22　明青灰色粘質土

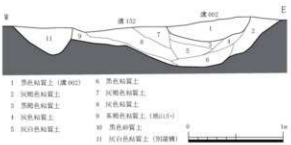
0　1m

第9図　溝001断面図（1/40）

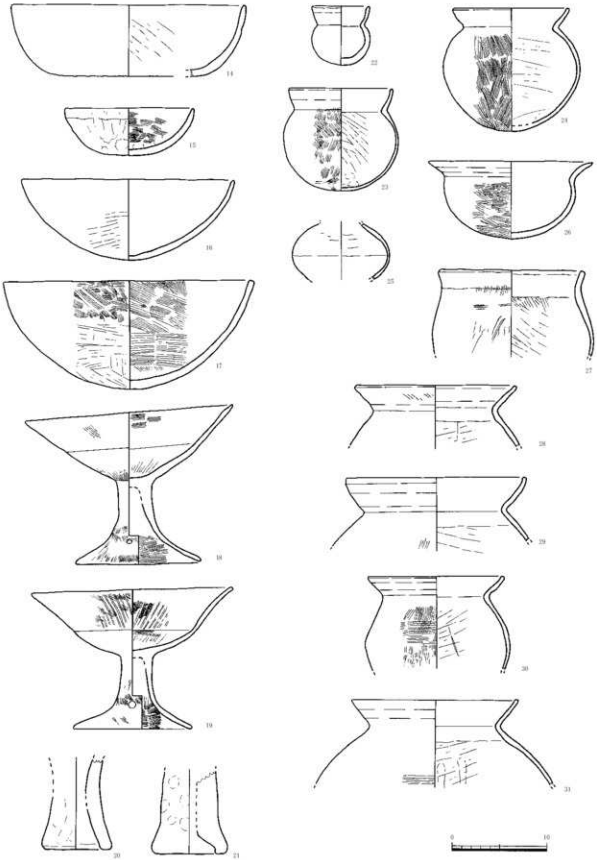


第10図　溝001出土遺物（1/4）

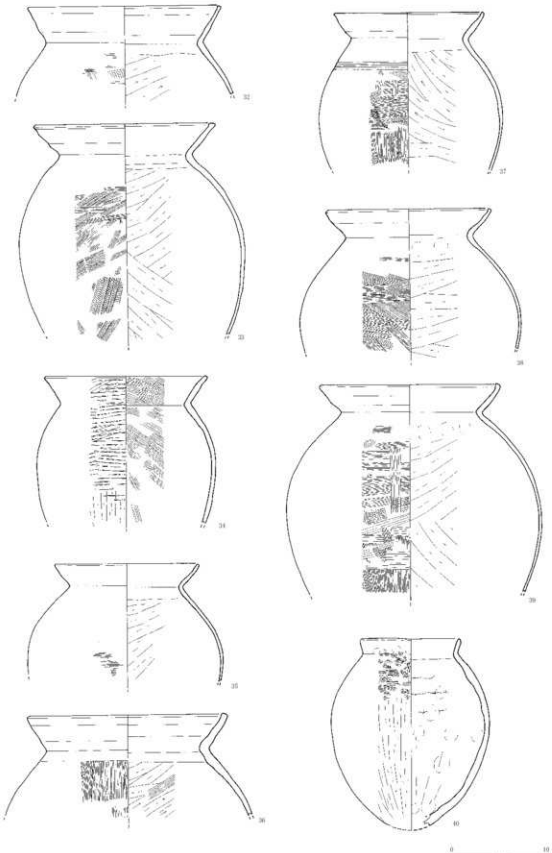
的である。脚部裾部に0.6 cm×0.6 cmの穿孔が3か所ある。調整は全体的にハケ目調整がされている。胎土は精緻で2 mm以下の石英・長石を含む。色調は橙色を呈する。**19**は口径21.2 cm、器高15.0 cm、脚部径12.4 cmを測る。坏部は体部でやや屈曲し、口縁部が外反する。脚部裾部に3か所穿孔がある。坏部の外面と内面にはヨコハケ→縦方向のヘラで調整が行われている。脚部は細かいハケ目調整である。胎土は精緻で5 mm以下の白色粒・橙色粒子を含む。色調は橙色を呈する。**20**・**21**は支脚である。**20**は底径7.4 cmを測る。外面に指おさえ痕がある。胎土は3 mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい橙色を呈する。**21**は底径8 cmを測る。外面には指おさえ痕がある。胎土は8 mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**22**は土師器の小壺である。ミニチュア土器である。口径は6.1 cm、器高は6.2 cmを測る。底部は丸底である。器壁のほとんどが摩滅しているが頸部にヨコナデが見える。体部下半部に黒斑がある。胎土は精緻で3 mm以下の石英・長石を若干含む。色調は橙色を呈する。**23**・**24**・**25**は土師器の壺である。**23**は口径11.0 cm、器高10.8 cmを測る。口縁端部は内湾している。外面はハケ目調整で、内面体部はケズリ調整、口縁部はヨコハケが行われている。胎土は2 mm以下の石英・長石・橙色粒子を含む。色調は淡赤橙色を呈するが、下半部は黒く二次焼成を受けていると思われる。**24**は口径12.4 cm、器高13.0 cmを測る。口縁端部は内湾している。外面は細かいタテハケがあり、内面口縁部はヨコナデで外面は横方向にケズリが施されている。底部はナデである。胎土は2 mm以下の石英・長石・橙色粒子を含む。色調は橙色を呈する。**25**は体部のみ残存している。外面は横方向のヘラミガキがされているか。胎土は精緻で、色調は橙色を呈する。**26**・**27**は土師器の鉢である。**26**は口径17.3 cm、器高8.2 cmを測る。口縁部は外反している。外面はヨコ・ナナメ・タテハケがされている。内面口縁部はヨコナデ、体部はナデ調整がされている。胎土は5 mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**27**は口径15.4 cmを測る。外面口縁部にハケ目があり、体部には工具痕と思われるものが見える。内面頸部にはタテハケ、体部にはケズリ調整がされている。胎土は4 mm以下の石英・長石・橙色粒子を含む。色調は淺黄橙色を呈する。**28**～**32**は土師器の甕である。**28**は口径28.0 cmを測る。口縁端部内面がやや凹む。外面頸部にヨコナデが、内面口縁部にヨコナデ、体部には横方向のケズリ調整がされている。胎土は5 mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**29**は口径19.1 cmを測る。口縁端部が内湾している。外面口縁端部と内面口縁部にヨコナデ、体部に横方向のケズリ調整がされている。胎土は2 mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄褐色を呈する。**30**は口径14.3 cmを測る。口縁端部が内湾する。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデ→タテ・ヨコハケ→タテハケ調整、内面体部はケズリ調整がされている。胎土は3 mm以下の石英・長石を含む。色調は灰白色を呈する。**31**は口径20.4 cmを測る。口縁端部が内湾している。外面はほとんどが摩滅しているが、一部ヨコハケが残っている。内面体部は指抑え痕があり、横方向のケズリ調整がされている。胎土は3 mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰白色を呈する。**32**は口径20.4 cmを測る。口縁端部はやや内湾する。外面のほとんどは摩滅しているが、一部ヨコハケが見える。内面は体部が指押さえ痕があり、その後横方向のケズリがある。胎土は2 mm以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**33**は口径19.7 cmを測る。口縁端



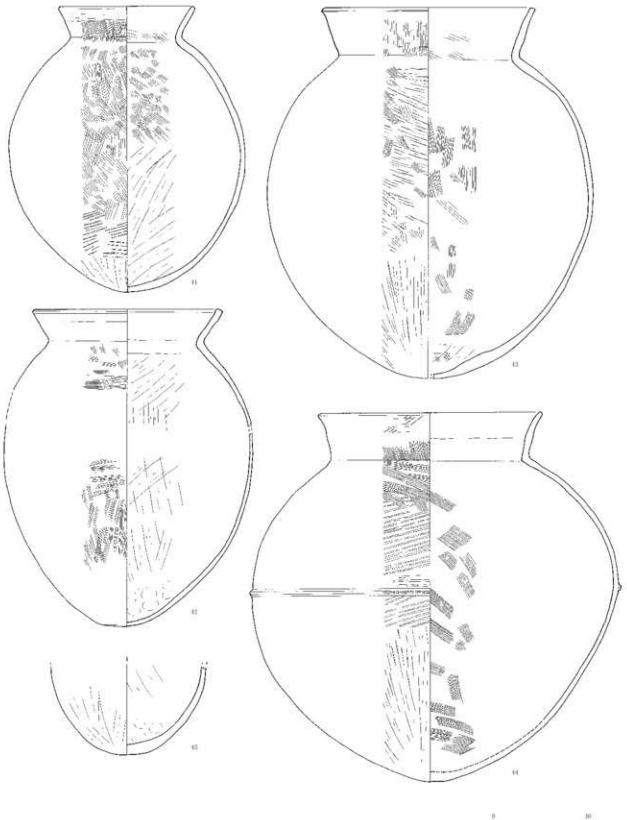
第11図　溝002・溝152土層断面図（1/40）



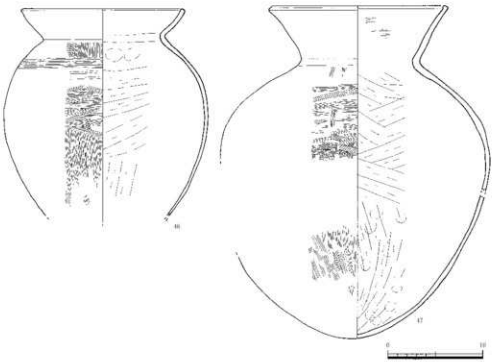
第12図　溝002出土遺物［1］(1/4)



第13図　溝002出土遺物［2］（1/4）



第14図　溝002出土遺物［3］(1/4)



第15図　溝002出土遺物［4］(1/4)

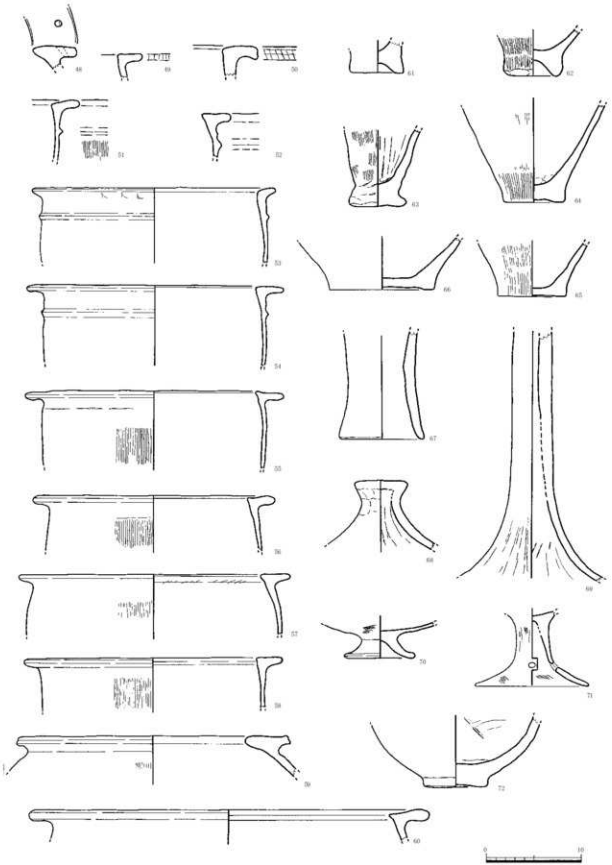
部がやや外反する。内面は口縁部がヨコナデ、体部上半部はヨコ・ナナメ方向のハケ目、下半部はタテ方向のハケ目がある。胎土は3㎜以下の石英・長石・橙色粒子を含む。色調は灰白色～浅橙色を呈する。**34**は口径17.2㎝を測る。口縁端部がやや外反する。外面は口縁部から体部上半部まで叩き痕があり、体部下半部はケズリがある。胎土は4㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰白色～浅黄橙色を呈する。**35**は口径15.2㎝を測る。口縁端部はやや内湾する。外面のほとんどが摩滅しているが、体部下半部にかすかにハケ目が見える。ただススが付着している。内面は体部にケズリ調整がある。胎土は3㎜以下の白色粒・橙色粒子を含む。色調は灰白色を呈する。**36**は口径21.2㎝を測る。口縁端部がやや内湾する。外面口縁部はヨコナデ、体部はタテハケがある。内面口縁部はヨコナデ、体部はケズリ調整がある。胎土は4㎜以下の石英・長石を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**37**は口径15.8㎝を測る。口縁端部はやや内湾する。体部上半部にヨコ・タテハケ、下半部はタテハケがある。内面体部にケズリ調整がある。胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色～黄橙色を呈する。**38**は口径17.6㎝を測る。口縁端部が内湾する。外面口縁部はヨコナデ、体部はヨコハケを行い、ススが付着している。内面口縁部はヨコナデ、体部はケズリ調整がある。胎土は2㎜以下の石英・長石を含む。色調は灰白色～浅黄橙色を呈する。**39**は口径19.0㎝を測る。口縁端部はやや内湾する。外面は体部が上半部にヨコハケ、下半部にヨコ・タテハケがある。内面体部にはケズリがある。頸部に指押さえ痕がある。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰白色～淡黄色を呈する。**40**は土師器の短頸壺である。口径は10.2㎝を測る。外面体部上半部はタテ・ヨコハケ、下半部はケズリ痕跡がある。胎土は5㎜以下の石英・長石を含む。色調は浅黄橙色～にぶい橙色を呈する。**41**は土師器の甕である。口径14.4㎝、器高30.1㎝を測る。外面口縁部はヨコナデ～タテハケ、体部上半部はタテ・ナナメハケ、下半部は叩き痕、底部はケズリ調整である。内面口縁部はヨコナデ～ナナメハケ、体部上半部はナナメハケ、下半部はケズリ調整である。胎土は5㎜以下の石英・長石

を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**42～44**は土師器の壺である。**42**は口径20.0㎝、器高33.3㎝を測る。外面口縁部はヨコナデ、体部細かいヨコ・タテハケである。全体にススが付着。内面口縁部はヨコナデ、体部はナナメ・縦方向のケズリ調整、底部に指押さえ痕がある。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**43**は口径22.6㎝、器高43.1㎝を測る。外面口縁部はタテハケ、体部上半部は叩き痕と粗いハケ目、下半部は粗い工具でケズリ調整である。内面口縁部は粗いナナメハケ、体部はタテ・ナナメハケである。胎土は5㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**44**は口径24.5㎝、器高38.7㎝を測る。口縁部は外反する。体部に突帯がつく。外面口縁部はタテハケ、頸部は叩き→ヨコハケ、中央は平行叩き、下半部はケズリ調整である。内面口縁部はヨコナデ、体部はハケ目調整である。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**45**は土師器の壺の下半部。外面は大きめのハケ目のちナデ消している。内面はケズリ→ナデである。胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**46～47**は土師器の甕である。**46**は口径17.6㎝を測る。口縁部は内湾する。外面体部に凹線がある。外面体部はタテ→タテヨコ→タテハケ、内面体部はケズリ調整である。口縁までススが付着。胎土は3㎜以下の石英・長石・橙色粒子を含む。色調は橙色を呈する。**47**は口径19.0㎝、器高35㎝を測る。口縁端部は内湾する。外面体部はヨコ→タテ・ヨコハケ→タテハケ、内面上半部はケズリ、下半部は指押さえ痕→ケズリ調整である。胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰白色を呈する。

溝152（第4図・第11図）

調査区の南西側で検出されたおよそ南北に延びる溝である。確認できる長さは20.5mで最大幅は2.5m、深さ0.4mである。溝002に切られている。埋土内から数多くの弥生土器などの土器片と磨製石剣や石斧などが出土している。

出土遺物（第16図、図版6・7）　**48**は弥生土器の壺の口縁部小片である。口縁端部に穿孔がある。調整はヨコナデである。胎土は5㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**49～50**は弥生土器の甕の口縁部小片である。口縁端部に刻み目がある。**49**は胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**50**は胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色～淡橙色を呈する。**51～52**は弥生土器の甕の鋤先口縁部である。**51**は口縁直下に断面三角形の突帯がある。突帯下半にタテハケがある。胎土は6㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**52**は口縁直下に断面三角形の突帯がある。外面内面はヨコナデである。**53～58**は弥生時代の甕である。**53**は口径25.6㎝を測る。口縁直下に断面三角形の突帯がある。外面口縁部に工具痕がある。胎土は2㎜以下の赤色粒を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**54**は口径27.2㎝を測る。口縁直下に断面三角形の突帯がある。胎土は4㎜以下の石英・長石を含む。**55**は口径27.4㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。外面体部はタテハケ、他はナデ調整である。胎土は6㎜以下の石英・長石を含む。色調はにぶい橙色を呈する。**56**は口径25.6㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。外面体部はタテハケ、他はナデ調整である。胎土は3㎜以下の石英・長石を含む。色調は浅黄橙色～褐灰色を呈する。**57**は口径28.8㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。外面体部はタテハケ、他はナデ調整である。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**58**は口径27.6㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。外面体部はタテハケ、他はナデ調整である。胎土は4㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい橙色を呈する。**59**は弥生土器の壺の口縁部である。口径は28.2㎝を測る。ナデ調整である。胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色



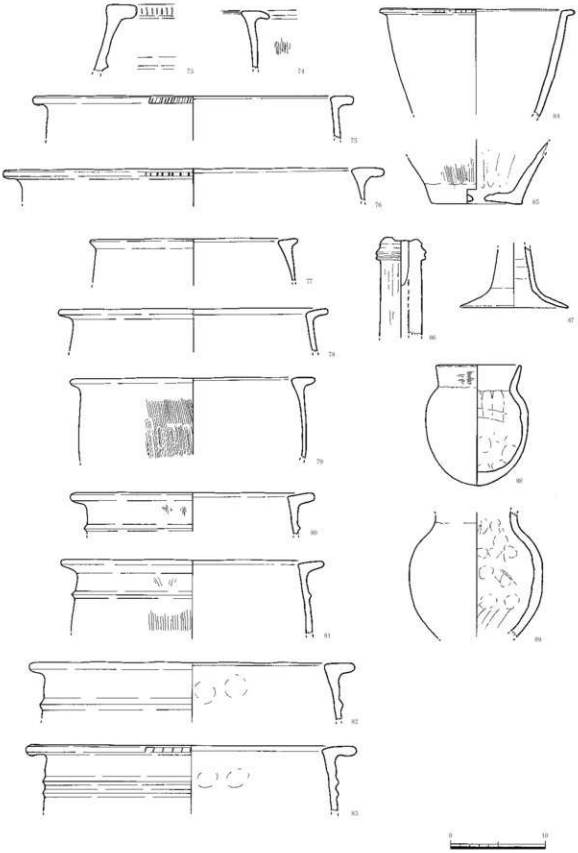
第16図　溝152出土遺物（1/4）

調は浅黄橙色を呈する。**60** は弥生土器の甕の口縁部である。口径は 42.4 ㎝を測る。口縁端部が内側に突出する。ナデ調整である。胎土は 3 ㎜以下の石英・長石を含む。色調は灰黄褐色を呈する。**61～65** は弥生土器の甕の底部である。**61** は底径 5.8 ㎝を測る。上げ底である。ナデ調整である。胎土は 3 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。**62** は底径 6 ㎝ぐらい。一部欠けている。上げ底である。外面はハケ目で、内面はナデ調整である。胎土は 8 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**63** は底径 6.6 ㎝を測る。外面はハケ目で、他はナデ調整である。胎土は 4 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は黒色を呈する。**64** は底径 6.3 ㎝を測る。やや上げ底である。外面はハケ目で、他はナデ調整である。胎土は 6 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰黄褐色～橙色を呈する。**65** は底径 7.6 ㎝を測る。やや上げ底である。外面はハケ目で、他はナデ調整である。胎土は 2 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。**66** は弥生土器の壺の底部である。底径は 11.0 ㎝を測る。ナデ調整である。胎土は精緻で 5 ㎜以下の白色粒を含む。色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。**67** は弥生土器の器台である。径 9.0 ㎝を測る。胎土は粗く 3 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。**68** は弥生土器の蓋である。つまみ径 5.7 ㎝を測る。外面に指押さえ痕、他はナデ調整である。胎土は精緻で白色粒を若干含む。色調は灰白色～浅黄橙色を呈する。**69** は弥生土器の高坏か。一部丹塗りがある。内面に工具痕がある。ナデ調整である。胎土は精緻で 4 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。**70～71** は弥生土器の高坏である。**70** は脚部径 7.5 ㎝を測る。ナデ調整である。胎土は精緻である。色調は灰白色を呈する。**71** は脚部径 12.0 ㎝を測る。脚部に 3 か所穿孔が残存している。実際は 4 か所か。坏部底部にミガキかっ。脚部の一部はハケ目調整がある。胎土は精緻である。色調は橙色を呈する。**72** は弥生土器の壺の底部である。底径 6.6 ㎝を測る。内面に板状工具痕がある。外面はナデか。胎土は粗く、4 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。出土した石製品は後述する。

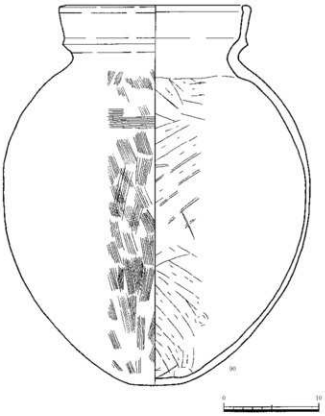
溝 154（第 4 図）

調査区の北側で検出されたおよそ南北に延びる溝である。確認できる長さは 8.5m で最大幅は 5.7m である。溝 001 に切られている。埋土内から数多くの弥生土器などの土器片や磨製石剣や石斧が出土している。

出土遺物（第 17・18 図、図版 8）　**73・74** は弥生土器の鉢の口縁部の小片である。**73** は口縁端部に刻み目がある。口縁直下に断面三角形の突帯がつく。ナデ調整である。胎土は 5 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**74** は口縁端部が内側にやや突出する。外面はタテハケ、他のナデ調整である。胎土は 2 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**75～84** は弥生土器の甕である。**75** は口径 34.0 ㎝を測る。口縁端部に刻み目がある。ナデ調整である。胎土は 2 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色～灰黄褐色を呈する。**76** は口径 40.0 ㎝を測る。口縁端部に刻み目がある。ナデ調整である。胎土は 5 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰白色～浅黄褐色を呈する。**77** は口径 22.0 ㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。ナデ調整である。胎土は5 ㎜以下石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**78** は口径 28.6 ㎝を測る。胎土は 2 ㎜以下の石英・長石・雲母を多量に含む。色調は橙色を呈する。**79** は口径 26.0 ㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。外面にタテハケ、他はナデ調整である。胎土は 7 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色を呈する。**80** は口径 26.0 ㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。口縁直下に断面三角形の突帯がつく。外面はハケ目、他はナデ調整である。胎土は 5 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**81** は口径 28.0 ㎝を測る。口縁端部が内側にやや



第17図　溝154出土遺物［1］(1/4)



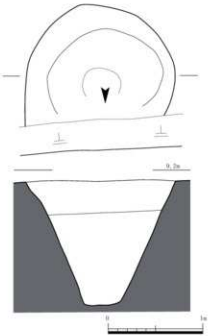
第18図　溝154出土遺物［2］(1/4)

突出する。口縁直下に断面三角形の突帯がつく。外面はハケ目、他はナデ調整である。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は橙色～にぶい黄橙色を呈する。**82**は口縁端部が内側にやや突出する。口縁直下に断面三角形の突帯がつく。内面に指おさえ痕がある。胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい橙色を呈する。**83**は口径35.0㎝を測る。口縁端部が内側にやや突出する。口縁端部に刻み目がある。口縁直下に断面三角形の突帯が2条つく。ナデ調整である。内面には指おさえ痕がある。胎土は5㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい橙色を呈する。**84**は口径20.4㎝を測る。口縁端部に刻み目がある。ナデ調整である。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰黄褐色を呈する。**85**は弥生土器の甕の底部である。底径9.6㎝を測る。底に焼成後にあけられた穿孔がある。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**86**は弥生土器の高坏の脚部か。丹塗りが施されている。中心に1.3㎝×4.7㎝の粘土の棒状のものが入っている。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰黄褐色を呈する。**87**は土師器の高坏の脚部である。脚部径11.4㎝を測る。胎土は3㎜以下の赤色粒を多く含む。色調は浅黄橙色を呈する。**88**・**89**・**90**は土師器の壺である。**88**は口径9㎝、器高12.8㎝を測る。外面口縁部はヨコハケ、内面体部には指おさえ痕がある。胎土は4㎜以下の石英・長石・雲母を含む。**89**は外面はナデ、内面には指おさえ痕と工具痕がある。胎土は4㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**90**は口径20.4㎝、器高40.2㎝、底径6.0㎝を測る。底部はレンズ底である。外面口縁部はヨコナデ、体部はタテ→ヨコ→ナナメハケ、内面口縁部はヨコナデ、体部はケズリ調整である。胎土は5㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。

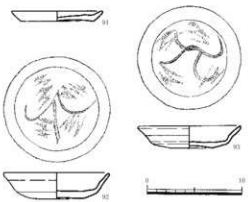
溝189（第4図）

調査区南西側に位置する南北方向の浅い溝である。確認できる長さで7.5m、最大幅1.1m、深さ20～30㎝である。

出土遺物　土師器などが出土したが、そのほとんどは破片かつ小片で図化できなかった。



第 19 図　井戸 147 実測図（1/40）



第 20 図　井戸 147 出土遺物（1/4）

3）井戸

井戸 147（第 19 図、図版 2）

調査区の北東側で検出された素掘りの井戸である。一部調査区外である。径 1.54m、深さ 1.3m である。

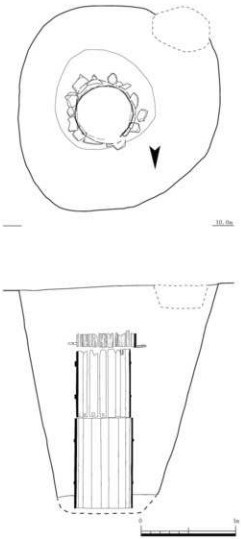
出土遺物（第 20 図、図版 8）　**91** は土師器の皿である。口径 9.6 ㎝、器高 1.6 ㎝、底径 7.8 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りである。胎土は精緻である。色調は明褐灰色を呈する。**92・93** は青磁平底皿である。**92** は口径 11.3 ㎝、器高 2.6 ㎝、底径 5.6 ㎝を測る。底部以外は施釉されている。見込に櫛描き文がある。胎土は灰白色で精緻である。釉薬はオリーブ灰色を呈する。**93** は口径 11.1 ㎝、器高 2.4 ㎝、4.8 ㎝を測る。底部以外は施釉されている。見込に櫛描き文がある。胎土は灰白色で精緻である。釉薬はオリーブ灰色を呈する。

井戸 023（第 21 図、図版 3・図版 11・12）

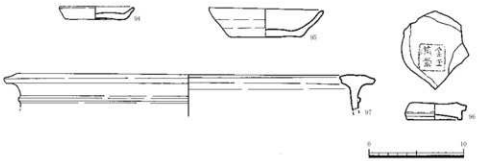
調査区南西側から検出された井戸である。径 2.1m、深さ 2.4m である。桶組の井戸である。桶は 3 段あったと思われる。上から 1 段目・2 段目・3 段目とする。1 段目は腐食が激しくほとんど残っていない。1 段目と 2 段目の間に石材が桶の周りに配置されている。2 段目は上部がやや腐食している。下部に棧穴（さんあな）があいているもの多くあり、また先端を加工したものがあり 4 類に分類できる（第 23 図）。2 段目は建築部材を転用したものと考えられる。3 段目は腐食がほとんどなくしっかりと残存していた。棧穴があいたものが 2 か所あり、また先端を尖らせて加工している。2 段目と 3 段目の各木材の法量などは表 1 に記載している。ただ 2 段目は取り上げる際に番号をつけられなかったため、仮番号をつけた。3 段目は番号をつけて取り上げた（第 23 図）。

出土遺物（第 22 図・第 33 図、図版 9）　**94** は土師器の皿である。口径 8.0 ㎝、器高 1.4 ㎝、底径 6.2 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りである。若干板状圧痕があるように見える。胎土は精緻である。

色調はにぶい黄橙色を呈する。**95** は土師器の坏である。口径 12.2 ㎝、器高 3.1 ㎝、底径 7.6 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りである。他はナデ調整である。胎土は精緻である。色調はにぶい黄橙色を呈する。**96** は青磁皿底部を転用した瓦玉である。3 段目の桶内から出土した。底径 6.0 ㎝を測る。見込みと高台に施釉している。見込みに「金玉満堂」の陰刻がある。胎土は灰色～灰白色を呈し精緻である。釉薬は灰オリーブ色を呈する。**97** は甕棺の破片である。口径は 78 ㎝(復元)。口縁直下に M 字突帯がつく。ナデ調整である。胎土は 4 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰白色を呈する。**163** は斎串である。最大残存長 23.6 ㎝、最大残存幅 5.3 ㎝、最大厚さ 0.6 ㎝を測る。下半部は鋭利な刃物で加工されている。中央がやや焦げている。



第 21 図　井戸 023 実測図（1/40）



第 22 図　井戸 023 出土遺物（1/4）

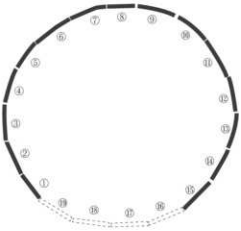
表1　井戸023　井戸枠計測表

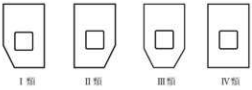
2段目

No.	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	桟穴	下端部加工
1	101	10	3	○	Ⅰ類
2	100.8	12	2.8	○	Ⅰ類
3	102	11	3.1	○	Ⅱ類
4	103.8	10	3	○	Ⅱ類
5	102	12.8	2.8	○	Ⅰ類
6	103	10.6	3.5	○	Ⅲ類
7	101.8	10.5	3	○	Ⅱ類
8	100	12	2.8	○	Ⅳ類
9	104.9	10.5	3.2	○	Ⅰ類
10	105	8.8	3.5	○	Ⅲ類
11	100.8	9	2.8	○	Ⅳ類
12	99	9.9	2.8	○	Ⅱ類
13	100.5	11	3	○	Ⅲ類
14	105	9.5	3.5	○	Ⅱ類
15	99.5	10.2	3	○	Ⅳ類
16	102.6	10	3.5	×	Ⅳ類
17	101	9.5	3	○	Ⅲ類
18	103.8	13	3.1	○	-
19	104	11	2.8	○	-
20	96	11.8	3.8	×	Ⅳ類

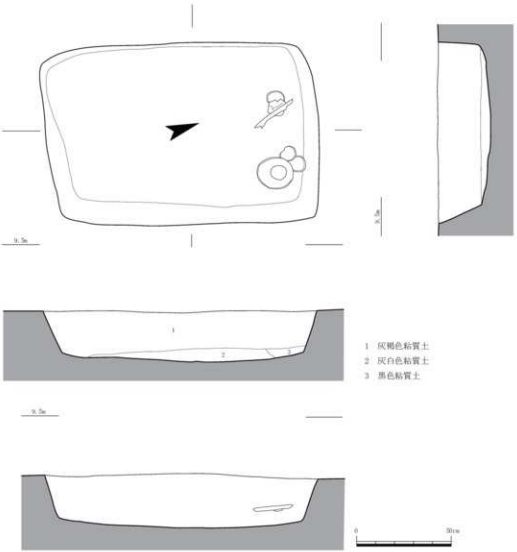
3段目

No.	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	桟穴
1	120	10	3	○
2	98	13	3.1	×
3	98	12.5	3.3	×
4	103	11.6	3.3	×
5	101.5	10	3.8	×
6	102	12.2	3.5	○
7	103.6	11.7	3.5	×
8	103	10.2	4	×
9	101.5	12	3.4	×
10	103	12.5	3.4	×
11	101	12	3.2	×
12	103	11	3	×
13	100	14.2	3.5	×
14	101.5	11	2.8	×
15	104	10.3	3	×
16	104.4	10.4	3	×
17	101.5	11.1	3.5	×
18	97	9.5	2.8	×
19	102	12.3	3	×





第23図　井戸023 No.対応図と分類図



第 24 図　土壙墓 171 実測図（1/20）

4）土壙墓

土壙墓 171（第 24 図）

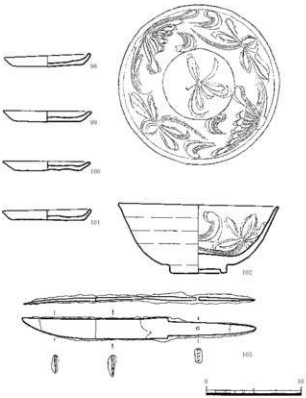
調査区の北東側で検出された土壙墓である。長軸 145 ㎝、短軸 97 ㎝、深さ 26 ㎝を測る。北東側に土師器、青磁椀、鉄製小刀がまとまって出土した。

出土遺物（第 25 図、図版 9）　**98～101** は土師器の皿である。**98** は口径 9.0 ㎝、器高 1.3 ㎝、底径 7.6 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りで、板状圧痕がある。他は回転ナデ調整である。胎土は精緻である。色調は灰白色～灰黄色を呈する。**99** は口径 9.3 ㎝、器高 1.2 ㎝、底径 7.0 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りで板状圧痕がある。他は回転ナデ調整である。胎土は精緻である。色調は浅黄橙色を呈する。**100** は口径 9.1 ㎝、器高 1.0 ㎝、底径 7.0 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りで、板状圧痕がある。胎土は精緻である。色調は浅黄橙色を呈する。**101** は口径 9.3 ㎝、器高 1.2 ㎝、底径 7.6 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りで、板状圧痕がある。胎土は精緻である。色調は浅黄橙色を呈する。**102** は青磁椀である。口径 16.8 ㎝、器高 7.4 ㎝、底径 6.0 ㎝を測る。内面と見込みに花文がある。胎土は灰白色で精緻である。釉薬は明オリーブ灰色を呈する。**103** は鉄製小刀である。全長 24.6 ㎝、

刃部長 15.4 ㎝、茎長 9.2 ㎝、身幅 2.2 ㎝、身厚0.3 ㎝を測る。一か所目釘穴がある。

5）他の遺構出土土器（第 26・27 図）

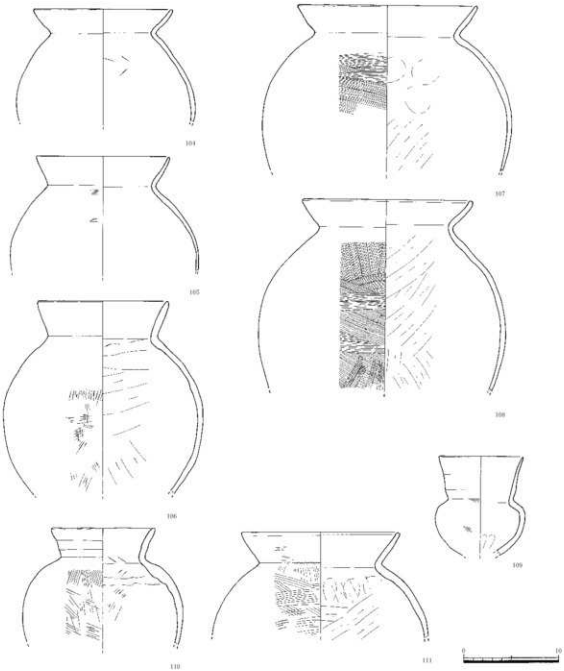
104～108 は調査区南側で検出された 049 で出土した土師器の甕である。**104** は口径 14.6 ㎝を測る。 器壁は摩滅していて調整はほとんど見えない。口縁部は内湾する。胎土は2㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色～灰色を呈する。**105** は口径 14.1 ㎝を測る。 口縁部は内湾する。器壁は摩滅が激しいが、外面体部の一部にヨコハケが見える。胎土は5㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は淡黄色～浅黄橙色を呈する。**106** は口径 13.8 ㎝を測る。外面体部はタテ・ヨコハケ、 内面体部はケズリ調整がある。胎土は 2 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。 色調は浅黄橙色～褐色を呈する。**107** は口径 19.0 ㎝を測る。 口縁部は直線的である。外面体部はヨコハケ、内面体部指押さえ痕とケズリ調整がある。胎土は 4m 以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**108** は口径 17.8 ㎝を測る。口縁部は内湾する。外面口縁部はヨコナデ、体部はタテ→ヨコ→ナナメ→タテハケ、内面体部はケズリ調整がある。胎土は3㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄色～灰黄色を呈する。**108** は土師器の壺である。口径 8.9 ㎝を測る。口縁部はやや外反する。外面体部はハケ目が少し残っている。内面体部は指押さえ痕がある。胎土は粗く 4 ㎜以下の石英・長石を含む。色調はにぶい橙色を呈する。



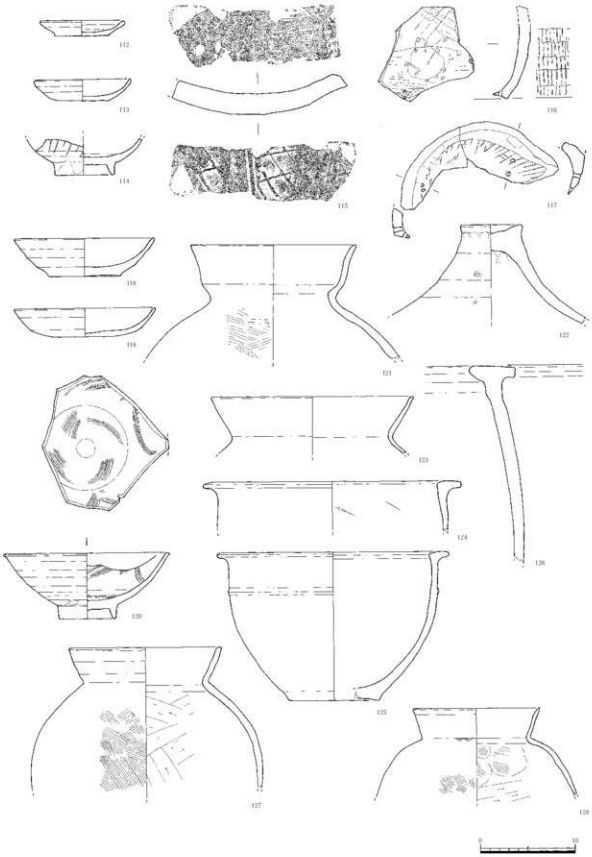
第 25 図　土壙墓 171 出土遺物（1/4）

110・111 は調査区南側で検出された 056 で出土した土師器の壺と甕である。**110** は口径 11.0 ㎝を測る。口縁部はやや外反する。外面体部はタテ→タテ・ナナメハケ、内部体部はナナメハケがある。胎土は 5 ㎜以下の石英・ 長石を含む。 色調は淡橙色～灰色を呈する。**111** は口径 16.8 ㎝を測る。 後年部はやや内湾する。外面体部はタテ→ナナメ→ヨコ→ナナメ→ヨコハケ、内面口縁部はヨコナデ、体部は指押さえ痕とケズリ調整がある。胎土は 3 ㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。

112～117 は調査区西側で検出された 122 で出土した遺物である。**112** は土師器の皿である。口径8.9 ㎝、器高 1.7 ㎝、底径 6.0 ㎝を測る。底部調整は回転糸切りである。他は回転ナデ調整である。胎土は精緻である。色調は灰白色を呈する。**113** は瓦器？の皿である。ミガキは見られないため土師器の可能性もある。口径 10.1 ㎝、器高 1.7 ㎝、底径 6.0 ㎝を測る。体部は内湾する。底部調整は回転糸切りである。他は回転ナデ調整である。胎土は精緻である。色調は灰色である。**114** は白磁椀である。高台径 6.3 ㎝を測る。外面に片切彫の縦線がある。高台から体部にかけて施釉している。胎土は精緻で灰白色を呈する。釉薬は灰白色を呈する。**115** は平瓦である。凹面は布目痕、凸面は格子目叩き痕がある。胎土は 4 ㎜以下の白色粒を含む。 色調は灰色を呈する。**116・117** は滑石製の石鍋の転用品



第 26 図　その他の遺構出土遺物［1］（1/4）



第 27 図　その他の遺構出土遺物［2］(1/4)

である。**116** の内面底部に 0.7 ㎝の穿孔があり、破片の端にも穿孔した痕跡が見える。破片の中央がやや凹んでおり、何か薄茶色のものが付着している。外面にはノミ痕がある。またススが付着している。**117** は石鍋の下半部から底部にかけての２つの破片である。底部にそれぞれ２個穿孔がある。穿孔の径は６～８ ㎜である。内面には調整痕がある。外面体部にはノミ痕がある。またススが付着している。

118 は調査区西側で検出された 125 で出土した土師器の坏である。口径 14.8 ㎝、器高 4.0 ㎝、底径 7.5 ㎝を測る。底部調整は回転糸切り→板状圧痕である。他はナデ調整である。胎土は２㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。

119・120 は調査区で検出された 130 で出土した。**119** は土師器の皿である。口径 15.0 ㎝、器高 3.0 ㎝、底径 6.0 ㎝を測る。器壁の摩滅が激しい。胎土は精緻である。色調は浅黄橙色を呈する。**120** は白磁椀である。口径 17.5 ㎝、器高 6.9 ㎝、高台径 6.0 ㎝を測る。口縁端部が外反している。内面に櫛描き文と短い曲線がある。口縁部から体部上半部に施釉している。削りだし高台である。胎土は灰白色、釉薬は明オリーブ色を呈する。

121 は調査区南西側で検出した 150 から出土した土師器の壺である。口径 17.6 ㎝である。口縁部は外反する。外面体部に粗いヨコ・ナナメハケがある。胎土は７㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色～灰褐色を呈する。

122～125 は調査区南東端で検出した 207 で出土した。**122** は弥生土器の蓋である。頂部径 6.4 ㎝を測る。外面にわずかにハケ目が見える。頂部には指おさえ痕がある。内面は指押さえ痕とナデがある。胎土は２㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい橙色～灰褐色を呈する。**123** は土師器の甕である。口径 21.4 ㎝を測る。全体的に摩滅している。胎土は１㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**124** は弥生土器の甕である。口径 27.2 ㎝である。摩滅しているが、一部にナデ調整で見える。内面に工具痕がある。胎土は１㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は浅黄橙色を呈する。**125** は弥生土器の甕である。口径 24.4 ㎝、器高 15.7 ㎝、底径 4.4 ㎝を測る。体部に断面三角形の突帯がつく。全体的にナデ調整である。胎土は５㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調は灰黄褐色～褐灰色を呈する。**126** は甕棺の破片である。ヨコナデ調整である。胎土は３㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。

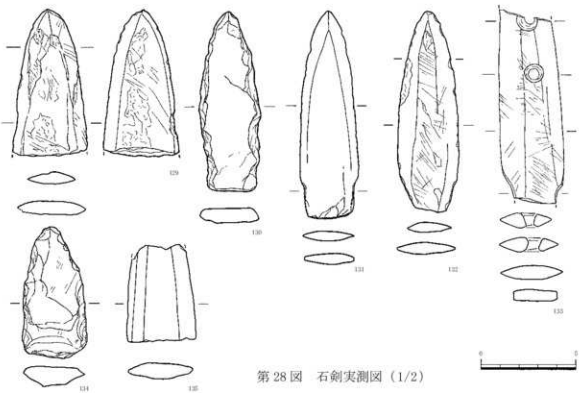
127・128 は調査区で検出した土師器の甕である。**127** は口径16.2 ㎝を測る。外面体部に粗いハケ目、内面体部はケズリ調整がある。胎土は５㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。**128** は口径 13.3 ㎝を測る。口縁部が外反する。外面体部にハケ目、内面体部にはハケ目、ケズリ調整がある。胎土は３㎜以下の石英・長石・雲母を含む。色調はにぶい黄橙色を呈する。

6）石製品（第 28～32 図）

磨製石剣（第 28 図、図版 10）

129・130 は溝 152 から出土した。**129** は先端部のみである。最大残存長 7.7 ㎝、最大残存幅 4.0 ㎝、最大残存厚 0.7 ㎝、重量 250g を測る。表面には擦痕がある。色調は灰色を呈する。**130** は未製品である。最大残存長 9.5 ㎝、最大残存幅 3.2 ㎝、最大残存厚 0.7 ㎝、重量 38g を測る。色調は灰色を呈する。

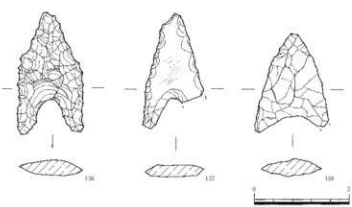
131～134 は溝 154 から出土した。**131** は最大残存長 11.0 ㎝、最大残存幅 3.05 ㎝、最大残存厚 0.6 ㎝、重量 29g を測る。全体的に磨かれている。色調は灰色を呈する。**132** は最大残存長 10.6 ㎝、最大残存幅 3.2 ㎝、最大残存厚 0.6 ㎝、重量 27g を測る。表面は磨かれているが、裏は磨かれていない。色調は灰色を呈する。**133** は石包丁に転用したと思われるものである。最大残存長 10.3 ㎝、最大残存幅 3.3



第 28 図　石剣実測図（1/2）

cm、最大残存厚 0.75 cm、重量 291g を測る。2 か所穿孔している。色調は灰色を呈する。**134** は未製品である。最大残存長 6.9 cm、最大残存幅 3.4 cm、最大残存厚 1.1 cm、重量 33g を測る。色調は灰白色を呈する。

135 は遺構検出の際に出土した。先端が折れている。最大残存長 5.2 cm、最大残存幅 3.6 cm、最大残存厚 0.8 cm、重量 22g を測る。色調は灰色を呈する。



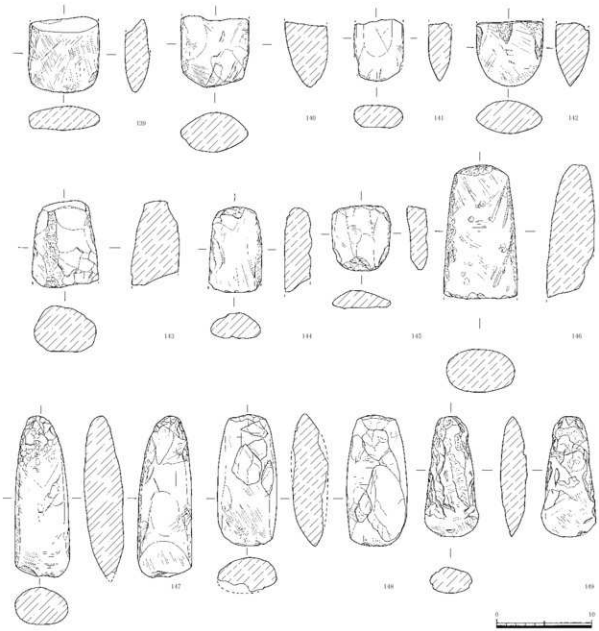
第 29 図　石鏃実測図（1/1）

石鏃（第 29 図、図版 10）

136 は溝 001 から出土した。最大残存長 3.2 cm、最大残存幅 1.7 cm、最大残存厚 0.4 cm、重量 26g を測る。石材は黒曜石である。色調は黒色を呈する。

137 は溝 002 から出土した。最大残存長 3.0 cm、最大残存幅 1.6 cm、最大残存厚 0.3 cm、重量 1g を測る。色調は黒色を呈する。

138 は調査区南西側で検出した 071 から出土した。最大残存長 2.6 cm、最大残存幅 2.0 cm、最大残存厚 0.4 cm、重量 2g を測る。



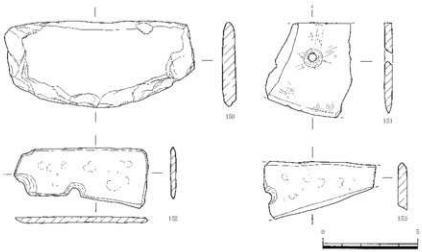
第 30 図　石斧実測図（1/4）

石斧（第 30 図、図版 10）

139～141 は溝 001 から出土した。**139** は最大残存長 8.0 ㎝、最大残存幅 7.8 ㎝、最大残存厚 2.6 ㎝、重量 236g を測る。色調は灰色を呈する。刃部は大部分が欠けている。表面・裏面には擦痕と使用痕がある。**140** は半分折れている。最大残存長 7.6 ㎝、最大残存幅 7.1 ㎝、最大残存厚 4.4 ㎝、重量 347g を測る色調は灰色を呈する。表面・裏面には擦痕と使用痕がある。**141** は半分折れている。最大残存長 6.5 ㎝、最大残存幅 5.1 ㎝、最大残存厚 2.3 ㎝、重量 135g を測る。色調は灰色を呈する。表面・裏面には擦痕と使用痕がある。

142 は溝 152 から出土した。先端部のみ残存している。最大残存長 6.9 ㎝、最大残存幅 7.0 ㎝、最大残存厚 3.5 ㎝、重量 246g を測る。色調は灰色を呈する。表面・裏面には擦痕と使用痕がある。

143～146 は溝 154 から出土した。**143** は茎部のみ残存している。未製品？の可能性。最大残存長9.2



第 31 図　石包丁実測図（1/2）

㎝、最大残存幅 7.0 ㎝、最大残存厚 5.0 ㎝、重量 495g を測る。色調は灰色を呈する。茎先端のみ研磨している。**144** は最大残存長 9.0 ㎝、最大残存幅 5.4 ㎝、最大残存厚 2.8 ㎝、重量 241g を測る。表面には擦痕と使用痕がある。裏面は磨かれていない。先端に敲打痕と思われる痕跡がある。色調は灰色を呈する。**145** は刃部のみである。一部加工されていて転用された可能性もある。最大残存長6.8 ㎝、最大残存幅 6.1 ㎝、最大残存厚 2.1 ㎝、重量 142g を測る。刃部に使用痕がある。色調は灰色を呈する。**146** は基部のみである。最大残存長 14.1 ㎝、最大残存幅 7.8 ㎝、最大残存厚 4.6 ㎝、重量 850g を測る。基端と両側縁に敲打痕がある。色調は青味をおびた灰色を呈する。**147** は最大残存長 17.0 ㎝、最大残存幅 5.6 ㎝、最大残存厚 3.95 ㎝、重量 628g を測る。刃部は一部欠損しているが、擦痕と使用痕がある。基端に敲打痕がある。色調は灰色を呈する。

148 は調査区南西側で検出した 039 から出土した。溝 152 を切っている。最大残存長 13.9 ㎝、最大残存幅 6.3 ㎝、最大残存厚 3.4 ㎝、重量 502g を測る。刃部に擦痕と使用痕がある。色調は灰色を呈する。

149 は調査区西側で検出した 176 から出土した。最大残存長 12.7 ㎝、最大残存幅 5.7 ㎝、最大残存厚 2.7 ㎝、重量 241g を測る。刃部と基部の一部に擦痕と使用痕がある。色調は黒味のおびた灰色を呈する。

石包丁（第 31 図、図版 10）

150 は未製品である。溝 002 から出土した。最大残存長 4.6 ㎝、最大残存幅 10.0 ㎝、最大残存厚 0.7 ㎝、重量 63g を測る。敲打して整形しているが、穿孔はしていない。色調は灰色を呈する。

151 は溝 152 から出土した。最大残存長 5.0 ㎝、最大残存幅 4.4 ㎝、最大残存厚 0.4 ㎝、重量 16g を測る。表面に使用痕がある。刃部の大分が欠けている。色調は黒味の強い灰色を呈する。

152 は調査区で検出した 187 から出土した。最大残存長 3.0 ㎝、最大残存幅 7.0 ㎝、最大残存厚 0.3 ㎝、重量 13g を測る。全面磨かれている。両端ともに刃が形成されている。1 か所穿孔している。色調は灰色を呈する。

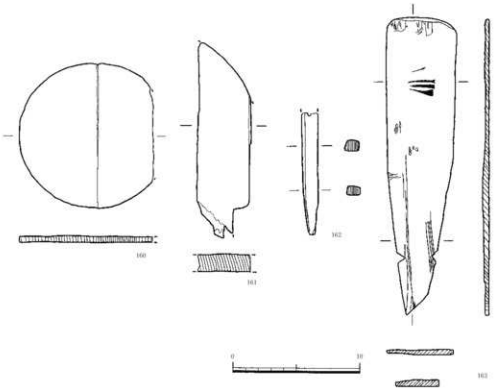
153 は 207 から出土した。最大残存長 3.0 ㎝、最大残存幅 5.8 ㎝、最大残存厚 0.5 ㎝、重量 14g を測る。1 か所穿孔している。色調は灰色を呈する。

第 32 図　砥石・台石実測図（1/8）

砥石・台石（第 32 図、図版 10）

154～158 は砥石である。**154** は溝 001 から出土した。最大残存長 16.5 ㎝、最大残存幅 9.1 ㎝、最大残存厚 3.1 ㎝、重量 628g を測る。側面の片方が欠けているが、3 面ともに擦痕と使用痕がある。表面には 4 条溝がある。色調は灰色を呈する。**155** は溝 152 から出土した。最大残存長 16.4 ㎝、最大残存幅 10.7 ㎝、最大残存厚 11.3 ㎝、重量 1800g を測る。1 面は欠けているが、5 面は使用しており、磨面している。石材は砂岩である。色調は灰色～にぶい黄橙色を呈する。**156** は井戸023から出土した。最大残存長 9.5 ㎝、最大残存幅 9.1 ㎝、最大残存厚 6.3 ㎝、重量 616g を測る。4 面ともに使用痕がある。色調は灰色を呈する。**157** は溝 152 から出土した。最大残存長 30.5 ㎝、最大残存幅 16.2 ㎝、最大残存厚 8.4 ㎝、重量 3500g を測る。表面と両側面に磨痕・使用痕がある。裏面にはノミによる調整痕がある。石材は砂岩である。**158** は溝 154 から出土した。最大残存長 9.9 ㎝、最大残存幅 12.6 ㎝、最大残存厚 5.9 ㎝、重量 580g を測る。1 側面が欠けているが、残り 5 面には使用痕と条痕がある。石材は砂岩である。色調は灰色を呈する。

159 は溝 002 で出土した台石である。最大残存長 23.9 ㎝、最大残存幅 18.6 ㎝、最大残存厚 8.0 ㎝、重量 5800g を測る。全体的に剥離が激しい。色調は灰色を呈する。



第 33 図　木器実測図（1/3）

第三章　まとめ

1）時期別の様相

今回の調査地点における検出遺構は、掘立柱建物 3 軒、溝 5 条・井戸 2 基・土坑墓 1 基、他柱穴・ピット多数であり、遺構の密度は非常に濃かった。検出遺構の時期も弥生時代から中世まで幅広く、当該地に連綿と生活が営まれたことがわかる。以下では時代ごとに各遺構をまとめていきたい。

弥生時代前期末から中期ごろの遺構として、溝 152、溝 154 があげられる。およそ南北に延びる溝である。今回の調査では中央部分の調査ができなかったため、これらの溝の関係ははっきりしないが、同一の溝と考えてもいいかもしれない。これらの溝は区画溝などといったものではなく、自然流路であると考えられる。またこれらの溝で特筆すべき点は、磨製石剣や石斧、砥石などの石製品の未製品および転用品が出土していることである。このことは、チップや剥片など加工を示すような遺物は出土していないが、当調査地点の未調査部分やその周辺で石製品の加工場があったことを示唆する。野方久保遺跡ではこれまでの調査でこれまでのこのような未製品などの石製品が出土したことはなく、特に磨製石剣が出土したことはこの遺跡を語る上で重要なものとなるだろう。石製品については次項で述べる。

野方久保遺跡の弥生時代といえば、第 1 次調査や第 2 次調査で多く見つかっている甕棺墓であるが、本調査でも甕棺の破片は何点か出土しているが、甕棺墓自体は見つかっていない。また同時期の竪穴住居などの生活痕跡も見つかっておらず、居住域および墓域とはまた違った空間であったと思われる。

古墳時代前期の遺構としては、溝 002 がある。溝 152 を切っておりおよそ同じ位置にあり、埋土内

から多くの土師器が出土している。このことから溝 152（及び 154）は溝 002 ができた頃にはすでに埋まっていたことが考えられる。ただこの溝 002 以外に古墳時代と考えられる明確な遺構は確認できなかった。

古代の遺構として、掘立柱建物 3 軒がある。3 軒とも方向があっており、規格性がある。特に隅丸方形の掘方に径 20～30 ㎝の柱痕跡がある掘立柱建物 01 は非常に官衙的な様相がある。野方久保遺跡がある「野方」周辺は和名抄にある「額田駅」の比定地にもなっている。また福岡平野と糸島平野をつなぐ官道の側溝が原遺跡と有田遺跡群で見つかっており、その官道を野方周辺まで延ばすと本調査地点のおよそ北側を通ると思われる。本調査地点で柱痕跡がしっかり残った掘方を持つ掘立柱建物 01 が見つかったことはこの周辺に「額田駅」があった可能性を示唆する。ただそれ以外に官衙的様相を示すものがなく、「額田駅」を明らかにするには今後の調査を待つほかない。

古代末～中世の遺構として、溝 001、井戸 023、井戸 147、土壙墓 171 がある。溝 001 は最大幅 5.5m、深さ 1，9m をはかる大型の L 字溝である。出土遺物から時期は概ね 12 世紀以降と思われる。この溝は中世の館の濠である可能性が考えられる。北側と西側にさらに溝は延びており、館の中心は本調査地点の北西側にあると考えられる。本調査地点が野方久保遺跡のおよそ北端に位置することから、遺跡の範囲はさらに北側ないし北西側に広がると考えられる。

井戸 023 では井側に桶を用いており、確認できるだけで 3 段確認している。1・2 段目は腐敗が激しいが、3 段目はほぼ腐敗しておらず、非常に残りがよかった。これら井側に用いられた木材は建築部材関連の 1 つである鼻繰がついたままの木材を転用したものであると考えられる。鼻繰は「工事現場に搬入する木材の端部にあけられた縄掛けのための穴（桟穴）」（鈴木 2015）である。通常建築などに使用する木材から必要な部材を加工する際に桟穴の部分は不要になる。そのため、端部を鋸などで切り捨てられる。その切り捨てられたものが出土することもある。今回は端部に桟穴を残したまま井側として転用されたと思われる。桟穴を残すものは 2 段目と 3 段目にあり、特に 2 段目に多い。これらの桟穴は 1 つで上下から穿って加工している。また桟穴がある方の端部は加工されているものがあり、その加工具合から Ⅰ～Ⅳ類に分類した（第 23 図）。これらの井側に転用する際に加工したものと思われる。3 段目には桟穴を残す木材は 2 点（取り上げ№1 と 6）のみ確認している。これらは先端加工されていない。一方でその他の木材は下方端部を斜めに切って加工している。これは目的が異なる建築部材を組み合わせて桶としていると考えられ、非常に興味深い。井戸 023 の時期は出土遺物が少なく決め手に欠けるが、3 段目の桶内から「金玉満堂」の刻印がある青磁が出土しており、12 世紀後半から 13 世紀ごろではないかと考えられる。

井戸 147 は素掘りの井戸で一部が調査区外に延びている。この井戸は溝 001 で囲まれた内に位置しており、中世の館に関連する井戸であると考えられる。

土壙墓 171 は完形の青磁椀や土師器、鉄製小刀がまとまって出土している。これらの遺物は土壙墓の北東側にまとまっている。青磁椀などから遺構の時期は 12 世紀後半から 13 世紀前半頃と考えられる。

これまで野方久保遺跡での調査で中世の遺構を確認できた事例はほとんどなく、野方久保遺跡及び周辺の中世の様相を考えるに重要な資料になるであろう。特に大型の溝である溝 002 を確認したことは館の存在を示すものと思われる。ただ館の中心となる部分は今回の調査区の北西側になると考えられ、今後の調査の進展で明らかになるであろう。また建築部材を転用した桶積上型の井戸 023 は福岡市内の他の遺跡ではほとんど見られない（すべてを確認したわけではないが）。そのため、今後の類例の増加を待って改めて考察したい。

2）石製品

本調査地点では、溝 152 及び溝 154 から磨製石斧 11 点、磨製石剣 7 点、石包丁 4 点、砥石 5 点、台石 1 点が出土している。磨製石斧、磨製石剣、石包丁では未製品や転用品も合わせて出土しており、チップや剥片などは出土していないが、周辺に石製品の加工場が存在していた可能性がある。これらの石製品の時期は共伴した弥生土器から前期末から中期前半ごろと考えられる。弥生時代前期から中期ごろの石斧加工場として今山遺跡がある。今山遺跡からは前期と中期の石斧加工状況が出土しており、加工工程などが明らかになっている。本調査地点から出土した石斧関連は未製品も出土している点からも今山遺跡から原石を持ち帰って石斧を製作したという状況が考えられる。本調査地点以外に集落遺跡で石斧の未製品やチップ、剥片などが出土している遺跡は、比恵遺跡群、有田遺跡群、周船寺遺跡などがある。これらの遺跡から出土している石斧は概ね弥生時代前期後半に比定されており、福岡市内において集落内で出土している石斧は前期後半のもののみと考えられている。

他の未製品などが出土した遺跡と大きく違う点は、磨製石剣の未製品も出土していることである。これまで福岡市内で磨製石剣は何点も出土しているが多くは甕棺内から出土しており、本調査地点で未製品が出土していることから、ここ（周辺にあるだろう加工場）が磨製石剣の供給場の一つである可能性が考えられる。今回出土した石剣は破損したり、未製品のものがほとんどであり、失敗品や破損したものを廃棄したものと考えられる。これらの石剣の法量は未製品も含むため、確実ではないがこの 7 点の残存幅を見ると、3.0～4.0 ㎝に収まっており、規格性があると思われる。またこれらの中で特徴的なものは石包丁に転用されたと思われる石剣（133）である。先端が折れているが、石剣中央に 2 か所穿孔がある。穿孔部分を確認する限り、縄がこすれた痕跡はなく、実際に使用されたかどうかはわからない。そのため実際に石包丁として転用されたかは不明だが、非常に興味深い遺物である。

磨製石斧や磨製石剣の他にも砥石が 5 点出土している。ただ溝 152・溝 154 から出土したものは 155・157 の 2 点のみである。155 は 1 面が欠けているが、5 面とも磨面しており、使い込まれている。157 は非常に大型で残存長 30.5 ㎝もある。表面と両側面に磨痕・使用痕があり、裏面にはノミによる調整痕がある。これほど大型な砥石の存在は大型の製品が製作された可能性が考えられるか。

磨製石斧、磨製石剣などの未製品など複数の石製品加工場の存在を示唆する遺物が出土したことは石製品の加工、供給を考える上で重要な意味をもつものと思われる。周辺の今後の調査に注視していきたい。

最後に本調査地点では、弥生時代から中世まで幅広い時期のものが確認できた。そのためその遺物量も非常に多く、すべてを網羅的に、またまとまりのない報告になってしまった。すべては報告者の力量不足である。ご寛容頂きたい。ただ弥生時代の石製品、中世の館、井戸など、これまでの「野方」地域の歴史を再考する十分な資料である。これからの研究の一助になれば幸いである。

〈参考文献〉

鈴木康之 2015「港湾集落における木材加工技術 - 草戸千軒遺跡の井戸材を中心に - 」『木材の中世』高志書院

（1）調査区全景（南から）

（2）掘立柱建物 01 全景（東から）

（3）119 断面（西から）

（4）149 断面（西から）

（5）148 断面（西から）

（6）099 断面（西から）

（7）027 断面（西から）

（8）026 断面（南から）

（9）井戸 147 全景（北から）

（10）溝 002 全景（北から）

（11）溝 152（南西から）

（12）溝 002・152 断面（南から）

（13）井戸 023　1 段目（北から）

（14）井戸 023　2 段目（北から）

（15）井戸 023　3 段目（北から）

（16）土壙墓 171 全景（南西から）

（17）溝 001 出土遺物

（18）溝 002 出土遺物〔1〕

(19) 溝 002 出土遺物〔2〕

(20) 溝 152 出土遺物〔1〕

(21) 溝 152 出土遺物〔2〕

(22) 溝 154 出土遺物（73 ～ 90）

(23) 井戸 147 出土遺物（91 ～ 93）

(24) 井戸 023 出土遺物

(25) 土壙墓 171 出土遺物

129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160

(26) 石製品・木製品

2 段目 1～4 外

2 段目 1～4 内

2 段目 5～8 外

2 段目 5～8 内

2 段目 9～12 外

2 段目 9～12 内

2 段目 13～16 外

2 段目 13～16 内

2 段目 17～20 外

2 段目 17～20 内

3 段目 1～3 外

3 段目 1～3 内

（27）井戸 023 井戸枠〔1〕

3段目 4～6外

3段目 4～6内

3段目 7～9外

3段目 7～9内

3段目 10～12外

3段目 10～12内

3段目 13～15外

3段目 13～15内

3段目 16～19外

3段目 16～19内

（28）井戸023井戸枠〔2〕

報告書抄録

ふ り が な	のかたくぼいせき５
書　　名	野方久保遺跡５
副 書 名	―野方久保遺跡第６次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1394 集
編 著 者 名	山本晃平
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号　TEL 092-711-4667
発行年月日	2020 年３月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
のかたくぼいせき 野方久保遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくのかた１ちょうめ 西区野方１丁目 128番1、143番1、 150番1	40137	389	33° 33′ 37″	130° 18′ 38″	20170206 ～ 20170609	974.99	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野方久保遺跡 第６次調査	集落	弥生時代前期～中世	掘立柱建物３軒 溝５条 井戸２基 土壙墓１基	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、磨製石剣、石斧、瓦	弥生時代～中世にかけての集落跡

要　　約	本調査地点は野方久保遺跡の北端に位置する。弥生時代の流路、古墳時代の溝、古代の建物跡、中世の大型溝、井戸、土壙墓など多様な遺構を確認した。中でも弥生時代の流路から磨製石剣が７点出土し、他石斧などの石製品が多数出土した。古代の掘立柱建物は官衙的な様相を示している。中世の大型溝は館の存在を伺わせる。井戸も非常に残りの良い桶組の井戸で、建築部材を転用していると思われる。 弥生時代から中世にかけての複合的な集落の変遷を明らかにすることができた。

野方久保遺跡５

―野方久保遺跡第６次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1394 集
2020 年（令和２年）３月 25 日
発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
印　刷　株式会社ミドリ印刷
福岡県福岡市博多区西月隈 1-2-11

野方久保遺跡5

―野方久保遺跡第6次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一三九四集

二〇二〇

福岡市教育委員会